

『デイヴィッド・コパフィールド』における個人語

有岡拓也 吉田孝夫

序章

『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield* (1849-50)) は、ヴィクトリア朝の影響を最も受けた文豪チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の第 8 番目の小説で、ブラウン (Hablot K. Browne) の挿し絵つきで1849年5月から1850年11月まで Bradbury & Evans 社により月刊で出版された。ディケンズ自身も「すべての作品の中で『デイヴィッド・コパフィールド』が一番好きである」¹⁾と述べる程、この作品によせる思い入れは強かった。このことはディケンズが *David Copperfield* と作品名をつける前に *Charles Copperfield* と自分の名前の一部を付けようとしたことから分かる。

この作品はディケンズの作家経歴の中間点で書かれ、主人公デイヴィッドの虚構の自伝において作家自身の人生から素材が取られている。『デイヴィッド・コパフィールド』には様々な人物が登場する。チェスタンはディケンズが描くこれらの登場人物を次のように述べている。「この小説は現実的かつ空想的であるばかりでなく、空想的であるからこそ現実的にもなりおおせているのである。人間味ある誇張をもって描き出された人間の本質がそこにはある。…こういった人びとは現実味のある登場人物であるが、彼らは若さと情熱という絵の具で彩られているために現実味を帯びているのだ。彼らは現実味がありながら何だか空想的な感じのする人びとである。すなわち彼らは、現実の人びとが感じるように描かれた現実味のある人びとなのだ」²⁾。

ディケンズは登場人物に様々な個人語を使わせることにより、一層その人物像を読者に印象付けている。リーチは個人語 (idiolect) について「個人語とは、ある人の言語的な「指紋」、つまり個人としてその人を周囲の人々から区別するための話法の特徴を指す」³⁾と説明している。また吉田は「ディケンズは、登場人物にその人物特有の言語癖を与え、彼らに不滅の生命を吹き込んだ」⁴⁾と述べている。

本論は『デイヴィッド・コパフィールド』に登場する 4 人 (ミスター・ミコーバー, ミセス・ミコーバー, ミス・ベッチー・トロットウッド, ミス・モーチャー) の個人語について考察す

る。本文引用のテキストは山本忠雄註釈 *David Copperfield* (vols. I, II, III) 研究社英文学双書 (1954) を使用した。

第1章 ミスター・ミコーバー

ミスター・ミコーバーはディケンズの父親、ジョン・ディケンズ (John Dickens) がモデルになっている。ミコーバーは泣き始めたと思いきや、次の瞬間、好物のパンチ酒を飲みながら笑っているような楽道家である。スレイターはミコーバーを「あたりまえで退屈な、時には人を滅入らせ苦痛を伴ったりさえするような現実を、空想が豊かで不思議なものに変身させる力をもつという考えは、ディケンズ作品すべてにわたってみられる。ミコーバー氏はそれを体現する最高の例であろう」¹⁾と評している。また『デイヴィッド・コパフィールド』におけるミコーバーの存在をチェスタトンが「ミコーバーは巨大な存在である。生きることはあらゆるものを誇張することだという真実を、彼の存在がはっきりと断言している」²⁾と述べている。

河井はミコーバーの言葉について「Micawber 氏は文才に秀でるあまり、直截的な話し方をいさぎよしとせず、事実や意図を上回る発言 (overstatement) をしたり、身分不相応な高尚な文体 (lofty style) を好んで選ぶ。従って、比喩を用いた修辭的な文章が多く、悲惨な現実と調和せず滑稽味をかもし出すことになる。この種の文語的表現は David に宛てた手紙に多いのは当然としても、会話にもしばしば用いられる」³⁾と述べている。また吉田は「Mr. Micawber はものごとをあからさまに言うことをさげすみ、ことさらに晦渋な回りくどい言い方をする修辭家である」⁴⁾と説明している。

この章ではミスター・ミコーバーの言葉を6つのカテゴリー (1) 難解な表現, (2) 回りくどい言い回し, (3) 慣用句-‘in short’, (4) ‘something will turn up’, (5) 文学作品からの引用, (6) 格言に分けて考察する。

(1) 難解な表現

ミコーバーの言葉にはラテン語を起源とする多音節の語が多く見られる。山本はラテン語と英語の関係について、Since the middle of the fifteenth century a great many legal words and phrases of Latin origin have been imported into English, most of which have kept their existence to the present day. 「15世紀中頃から、ラテン語を起源とする多くの法律関係の単語や句が英語の中に取り入れられ、現在でもその多くが英語の中に存在している」⁵⁾と説明している。ラテン語を起源とする英語を列挙する。カッコ内はラテン語である。

peregrinations (peregrination-em) = wanderings (p. 193)

- arcane (arcanum の複数形で起源はラテン語の arcanum (neut)) = mysteries (p. 193)
- sanctum (sanctus) = a sacred place (p. 505)
- celibacy (caelibatus) = unmarried life (p. 510)
- laceration (laceratio(n)) = distress, affliction (p. 511)
- comestibles (comestus) = things to eat (p. 512)
- fallacious (fallaciosus) = misleading (p. 517, p. 949)
- contumely (contumelia) = in solent or insulting language or treatment (p. 519)
- contingent (contingentem) = dependent (p. 660)
- eligible (eligere) = suitable (p. 661)
- valedictory (valedict-um) = serving as a farewell (p. 663)
- domiciliary (domicilium) = concerned with or occurring in someone's home (p. 700)
- pecuniary (pecuniarius) = relating to, or consisting of money (p. 700, p. 1007)
- stipendiary (stipendiarius) = person receiving stipend or salary (p. 700, p. 883, p. 926)
- emoluments (emolumentum) = a salary, fee or benefit from employment or office (p. 700, p. 883, p. 1007)
- redound (redundare) = contribute greatly to (p. 701)
- vicissitude (vicissitudo) = a change of circumstances or fortune, alternation between opposite or contrasting things (p. 701)
- sardonically (sardonius) = in a sardonic manner (p. 879)
- cull (colligere) = to collect, to choose (p. 882)
- contortion (contortio(n)) = the action of twisting or writhing (p. 883)
- stipulate (stipulat-) = insist (p. 959)
- in the aggregate (aggregatus) = as a whole (p. 962)
- impertinent (impertinentem) = unconnected, unrelated (p. 962)
- impetus (impetus) = attack, force (p. 963)
- beverage (bibere) = a drink (p. 1001)
- denizens (deintus) = inhabitants (p. 1002)

ミコーバーは特に健康に関する表現で、ラテン語起源の英語を用いる傾向がある。

“Sir, I rejoice to reply that they are, likewise, in the enjoyment of salubrity.” 「いや、どうもありがとうございます。子どもも同様に健康を謳歌しております」 (p. 505)

I was glad to see him too, and shook hands with him heartily, inquiring how Mrs. Micawber was. “Thank you,” said Mr. Micawber, waving his hand as of old, and settling his chin in his shirt-collar. “She is tolerably convalescent.”私も彼に会えて嬉しかった。そして心から握手を交わし、奥さんはいかがです、と尋ねた。「いや、どうもありがとう」ミコーバー氏は昔のように、手を振り、シャツのカラーに顎をうめて、答えた。「だいぶん元気になってね」(p.319)

“How do you find yourself?” said Mr. Dick, with an anxious look. “Indifferent, my dear sir,” returned Mr. Micawber, sighing. “You must keep up your spirits,” said Mr. Dick, “and make yourself as comfortable as possible.”「ところで、どうなんですか、ご気分は？」ミスタ・ディックが心配そうに言った。「いや、それがどうもあんまりパツとしないでね」ミコーバー氏は、ため息をついて答えた。「元気を出すんですよ、そして、できるだけ呑気になることですよ」ミスタ・ディックは言った。(p.882)

(2) 回りくどい言い回し

ミコーバーが初めてデイヴィッドに会った時、自分の住む London 「ロンドン」を the Modern Babylon 「現代のバビロン」(p.193), また England 「英国」を the land of the Free 「自由の国」(p.1002) と称した。その他にも the sun 「太陽」を the God of day 「日の神」(p.204) (p.216) (p.664), their father 「彼らの父親」を the Author of their Being 「彼らの存在の創造者」(p.946), child 「子ども」を pledges of affection 「愛の結晶」(p.508), the wedding 「結婚式」を the Hymeneal altar 「結婚の祭壇」(p.511), Canterbury Cathedral 「カンタベリー大聖堂」を the venerable Pile 「古刹」(p.948), woodlanders 「森に住む人」を the denizens of the forest 「森の居住者」(p.1002) のように難解な文語表現を用いている。この回りくどい表現には、文学的なものや、暗示的なものが多い。

ミコーバーは長い間、食欲がないことを “Appetite and myself have long been strangers.” 「食欲と私は、長い間他人同士でね」(p.925) と言う。

また偶然デイヴィッドに出くわした時、^{ふたご}双生児のことを尋ねられ、乳離れしたことを次の様に述べている。

“The twins no longer derive their sustenance from Nature’s founts—in short,” said Mr. Micawber, in one of his bursts of confidence, “they are weaned.” 「あの双生児は、もう自然の泉から栄養をとることもなくなった。つまり、早く言えばね」と、ミコーバー氏は例のザックバラン調で言った。「乳離れしたというわけさ」(p.319)

ミコーバーは自分の心情を天候を用いて表現するが、その最たるものが雲である。雲は心の

霧として使われている。behind a cloud (p.215) は「雲がかかっているため太陽が照らない」つまり「逆境に苦しんでいる」という文学的表現で、また The cloud is past from my mind.「わが胸中の雲は晴れたぞ」(p.947) は自分の心の中の霧が全てなくなり、問題が全て解決したという意味で使われている。その他にも be beforehand with the world「世界の機先を制する」(p.207) を「金銭に十分な余裕ができる」の意で用いる。またミコーバーは自分自身を, Waif and Stray upon the shore of human nature 「人間界の岸辺に打ち上げられた漂流物（浮浪児）」(p.926) に例えている。

(3) 慣用句— ‘in short’

ミコーバーは慣用句の in short 「つまり、手短かに言えば」を20回以上様々な状況で用いている。OED は in short の機能を From the 18th c. onwards used only as parenthetical phrase, introducing or accompanying a summary statement of what has been previously said. 「18世紀以後、前に述べた陳述の要約の挿入句として使われている」と説明しているが、ミコーバーの場合は単なる要約になってないことが多い。ブルックは The style of his letters sometimes seems to overflow into his conversation. Long sentences are more at home in the written than in the spoken language, and Mr. Micawber’s spoken sentences often get out of hand, with the result that aposiopesis is frequent in his conversation. 「手紙の文体が時に彼の会話にあふれているようだ。長い文は話し言葉よりも書き言葉に適し、ミスター・ミコーバーはしばしば言葉につまる。このため、彼の会話には話中頓絶法が頻繁に起こる」⁶⁾と述べている。aposiopesis 「話中頓絶（法）」は途中で急に文を切ること。吉田はミコーバーの in short について、「意気こんで荘重なスタイルではじめて後が続かなくなると、中断し、‘in short’を用いて日常の直截的なやさしいことばで文をくくる」⁷⁾と述べている。ここではミスター・ミコーバーの in short を3つのカテゴリーに分けて論じる。

(I) 最初に文学的な修辭的表現で話を切り出す後が続かず、日常会話に戻っていく場合。

“The blossom is blighted, the leaf is withered, the God of day goes down upon the dreary scene, and — and in short you are for ever flooded. As I am!” 「花はしほみ、葉はしおれ、日輪も荒涼たる風物の上に、沈んでいく—つまりは、破産ってわけさ。今のわしのように！」(p.216)

“A pupil?” said Mr. Micawber, raising his eyebrows. “I am extremely happy to hear it. Although a mind like my friend Copperfield’s;” to Uriah and Mrs. Heep; “does not require that cultivation which, without his knowledge of men and things, it would require, still it is a rich soil teeming with latent vegetation — in short,” said Mr. Micawber, smiling, in another burst of confidence, “it is an intellect capable of

getting up the classics to any extent.”「生徒としてかね？」ミコーバー氏が眉を上げて、聞いた。

「それはよかった、大いに結構」そしてヒープ母子の方を向くと、「なに、世の中のことを何も知らない、人間ならね、そうした教育、修養も必要だろうがね、仮にもわが友コパフィールド君のような人物ともなればだ、そんなものは、全然必要ないんですよ。そんなものはなくとも、立派に、たくましい植物の育成力を秘めた豊饒、肥沃の土壌—つまり、いや、手っ取り早く言えばだ」と、ミコーバー氏はまたザックバラン調になって、にやりと笑うと、「古典くらいのことは、いくらでもやれる頭を持っている」と言った。(p. 320)

“You may, perhaps, be prepared to hear that Mrs. Micawber is in a state of health which renders it not wholly improbable that an addition may be ultimately made to those pledges of affection which—in short, to the infantine group.”「聞いてもらいたいのだが、あの家内ミセス・ミコーバーだ。あれも、目下の健康状態じゃね、結局、わが家の愛の結晶—つまり、早く言えば、子供だな—それに対して、さらに一点を追加する可能性も、まんざらなしとせず、ということだな」(p. 508)

(II) 相手の理解を助けるために、回りくどい表現を in short を使い、分かり易い表現で説明する場合。

“Under the impression,” said Mr. Micawber, “that your peregrinations in this metropolis have not as yet been extensive, and that you might have some difficulty in penetrating the arcane of the Modern Babylon in the direction of the City Road—in short,” said Mr. Micawber, in another burst of confidence, “that you might lose yourself—I shall be happy to call this evening, and instal you in the knowledge of the nearest way.”「お見受けしたところ」ミコーバー氏は言った。「この首都における君の遍歴は、まだそう足を伸ばしてはおられないようだな。この近代のバビロンの神秘を潜り抜けて、シティ・ロードまで来られるのは、ちょっと困難であるかもしれん—つまり」とミコーバー氏は、また例の打ち解けた調子になって言った。「迷子になるかもしれんということだな—そこで、今夜もう一度、わしが来て、一番近道の知識を提供して差し上げよう」(p. 193)

“My dear Copperfield,” said Mr. Micawber, putting out his hand, “this is indeed a meeting which is calculated to impress the mind with a sense of the instability and uncertainty of all human—in short, it is a most extraordinary meeting.”「これは、これは、コパフィールド君」ミコーバー氏は、片手を差し出して言った。「人生測り難しの感を、つくづく思わせるごとき、これはまず天—いや、つまり、奇遇中の奇遇というやつさね」(p. 318)

“My dear friend Copperfield,” said Mr. Micawber, “accidents will occur in the best-regulated families; and in families not regulated by that pervading influence which sanctifies while it enhances the—a—I

would say, in short, by the influence of Woman, in the lofty character of Wife, they may be expected with confidence, and must be borne with philosophy.” 「コパフィールド君」と、ミコーバー氏は切り出したのである。「災難は、どんなにきちんとした家にだって、起きるもんさ。ましてだ、この家庭ってやつを高め、かつ神聖化するところの、ええと、一遍在的勢力かな？一つまり、早く言えば崇高なる妻としての女の力だな—こいつのいないところじゃ、これは、もう必ず起こるものと思わなきゃならん。したがって、そこは達観して、耐え忍ぶことだな」(p. 512)

Ⅲ 言いたい言葉が即座に出ず、会話の繋ぎとして使っている場合

“Sometimes I have risen superior to my difficulties. Sometimes my difficulties have — in short, have floored me.” 「それらに打勝ったこともあれば、—そうだ、ノックアウトを食らったこともある」(p. 320)

“My friend Mr. Thomas Traddles has, on two several occasions, ‘put his name,’ if I may use a common expression, to bills of exchange for my accommodation. On the first occasion Mr. Thomas Traddles was left—let me say, in short, in the lurch.” 「わが旧友トマス・トラドルズ君は、我輩融通の為替手形に対して、2度までも、世間でよくいう、いわゆる『裏書』を承諾してくれたのであります。最初の場合について申せば、おかげでトマス・トラドルズ君は、ええ—なんというか、早く言えば、大変な窮地に落ちました」(p. 664)

“Do you see much of Mr. Wickfield?” I asked, to change the subject. “Not much,” said Mr. Micawber, slightly. “Mr. Wickfield is, I dare say, a man of very excellent intentions; but he is — in short, he is obsolete.” 「ウィックフィールドさんには、よくお会いになりますか？」私は、話題を変えてみた。「いや、あまり会わないね」と、ミコーバー氏は馬鹿にしたように言った。「ウィックフィールドさんは考えはまことに立派なんだが、どうも—そうだ、時代遅れだね」(p. 701)

(4) ‘something will turn up’

ミコーバーはいつも something turning up 「ことは良くなる」と言うのが口癖である。これは本来 waiting for something to turn up という言葉で、河井はこのミコーバーの口癖を「楽天主 Micawber 氏の人生哲学を象徴するもので、Brewer の成句辞典にもとりあげられて慣用表現になっている」⁸⁾と説明している。ミコーバーは実行力こそ伴っていないものの、人生というものはきっとすばらしいものに変わっていくものだという楽天的な考えを持っている。

ミコーバーは刑務所にいながら「うまくいけば」と、ただ幸運が自分の下に舞い込んでくるのを密かに心待ちにしている。

“I have no doubt I shall, please Heaven, begin to be beforehand with the world, and to live in a perfectly new manner, if—in short, if anything turns up.” 「きっと、これからは事がうまく運び、生活も一新するだろう、もし—要するに何かいいことが起これば」 (p. 207)

また、ミコーバーは商売のことを述べている時も、「大いに情勢好転の兆しがある」と、現実から考えられないような大転機を期待している。

“I am, however, delighted to add that I have now an immediate prospect of something turning up (I am not at liberty to say in what direction), which I trust will enable me to provide, permanently, both for myself and for your friend Traddles, in whom I have an unaffected interest.” 「ただ幸いにしてだな、近く、大いに情勢好転の兆しがある。(どういう面では、まだ発表の自由を持たんのだが)、なに、これさえ、うまく行きゃ、わしは、無論あの君の友人—そう、わしは、心からあの男を買っとるんじやが、あの君の友人トラドルズ君にもだ、もう一生、食いはぐれなんてことは、絶対にさせん」 (p. 508)

(5) 文学作品からの引用

ミコーバーは自分自身の想像から生まれた比喩表現を会話の中で用いるが、その他にもシェイクスピアやカトーなどの文学作品に使われた表現を引用する。

ミコーバーは妻の父親を評するとき、*Hamlet* の take him for all in all 「総体にあの人をみれば」 (I. ii. 187) を引用する。

“Your papa was very well in his way, and Heaven forbid that I should disparage him. Take him for all in all, we ne'er shall—in short, make the acquaintance, probably, of anybody else possessing.” 「お前の父親は、あれでどうして立派な人物だったさ。なにも、わしは、悪口なんか言うもんか。まあ、全体から見りゃ、そうだ—つまり、あんな人は、またとほかにいまいな」 (p. 216)

ミコーバーは妻の里の問題にふれるとき、*Julius Caesar* の it is not meet That every nice offence should bear his comment 「そんなちっぽけな人の罪に、一々難しいことを言っている場合ではない」 (IV. iii. 7-8) を引用する。

“‘It is not meet,’” said Mr. Micawber, rising, “‘that every nice offence should bear its comment!’ Emma, I stand reproved.” 「ああ、『区別たる罪をとやかく言うのは、時宜を得ず!』か。エマ、わしが悪かった」 ミコーバー氏は立ち上がって、言った。(p. 1002)

ミコーバーはユライア・ヒープと会食をしているデヴィッドに偶然出くわす。そこでミコーバーは自分の今の金銭上の困難をカトーの言葉を用いて表現する。

“I have given in, and said to Mrs. Micawber, in the words of Cato, ‘Plato, thou reasonest well. It’s all up

now. I can show fight no more.” 「わしは降参だ、そして家内に言ったもんだ。カトーの言い草じゃないがね。『プラトーよ、汝の説くところは、巧みなり。されど、今は力尽きて、すでに戦意なし』とね」(p.321)。この文句はカトーの *it must be so—Plato, thou reasonest well…* という原文から取ったものである。カトー (Marcus Porcius Cato) は紀元前1世紀、ローマの政治家、哲学者。シーザーを弾劾し、敗れて自殺した。

その他にもミコーバーはバイロン (Byron, *To Thomas Moore*) の句や、スコットランドの詩人、ロバート・バーンズ (Robert Burns, *Bruce's Address to His Army at Bannockburn*) のバノックバーンの戦いを歌った歌の一節を引用して、先行きの見えぬ自分の暗い気持ちを言い表している。

(6) 格言

ミコーバーは様々な場面で自分の格言を忠告としてデイヴィッドに与える。その格言はデイヴィッドに対してだけでなく、自分自身の教訓として言っているようにも受け取れる。

“My other piece of advice, Copperfield,” said Mr. Micawber, “you know. Annual income twenty pounds, annual expenditure nineteen nineteen six, result happiness. Annual income twenty pounds, annual expenditure twenty pounds ought and six, result misery.” 「わしのもう1つの忠告は、コパフィールド、年収20ポンドで、年支出19ポンド19シリング6ペンス、これは幸福になる。年収20ポンドで、年支出20ポンド、0シリング6ペンス、これは逆に不幸になる」ミコーバー氏は言った。(p.216)

“My dear friend Copperfield,” said Mr. Micawber, “accidents will occur in the best-regulated families.” 「コパフィールド、災難は行き届いた家にも起こるものだよ」ミコーバー氏は言った。(p.512)

“But punch, my dear Copperfield,” said Mr. Micawber, tasting it, “like time and tide, waits for no man.” 「だが、コパフィールド、ポンチ酒は」とミコーバー氏は、一口味をみながら、言った。「歳月と一緒に、人を待たずだからね」(p.516) *Time and tide wait for no man.* 「歳月人を待たず」にポンチ酒をかけて用いた。

第2章 ミセス・ミコーバー

河井はミセス・ミコーバーについて、「夫より物事を正しく見通す眼があり、夫を脱線させないようにするのは自分の役目と自負している夫人」¹⁾と説明している。チェスタトンがミセス・ミコーバーの存在をミスター・ミコーバーと比較し、次のように述べている。「ミコーバー

夫人のほうが技術的な面から言えばさらに優れた出来栄である。彼女はディケンズが描いたものの中でも最上の部類に属する。破滅状態の只中にいながら腰をおろして微笑み、事情を詳しく説明する時の彼女の、明晰かつ議論好きな話し方ほど馬鹿げた、と同時に真に迫るものはほかにあるまい。メドウエイ問題に関する彼女の発言の序論部分ほど明快で論理的で理路整然としたものがあるだろうか。…『デイヴィッド・コパーフィールド』の詩的人生観を無意識のうちに防衛しているものと考えれば、ミコーバー夫人の論理的な人生観を無意識のうちに諷刺しているものと考えることができよう。彼女はこの空想的で不合理な世界に直面して絶望し、為すすべをもたない理性の記念碑としてそこに坐っているのである²⁾。ミスター・ミコーバーはジョン・ディケンズがモデルになっていることは前章で明らかにしたが、ミセス・ミコーバーもまたディケンズの母親エリザベス・ディケンズをモデルとしている。この章ではミセス・ミコーバーの口癖と文語的表現を取り上げる。

(1) 口癖

ミセス・ミコーバーはいつも夫の能力を過信し、称賛する。その称賛の言葉は talent「才能」を用いた a man of great talent「随分なやり手」(p.211), a man of his talent「商才を持った人」(p.323), his talents「彼の商才」(p.950), Mr. Micawber, with a variety of qualifications, with great talent.「何にでも向いているすばらしい能力を持った主人」(p.519), また abilities「能力」を用いた a man of Mr. Micawber's abilities「主人のような腕のある人間」(p.322, p.659, p.950), sufficient range for his abilities「主人が思いっきり腕をふるえる広い土地」(p.962), Mr. Micawber's abilities peculiarly requiring space「とりわけ広い場所を必要とする主人の才能」(p.962)に見られる。その他にも spirit「精神、心」や power「力」を使い、a man of Mr. Micawber's spirit「主人のような気性を持った人」(pp.322-323), the latent power of Mr. Micawber「主人の隠し持った力」(p.1006)のように夫を褒めたたえている。

オーストラリアに移住する前に彼女は夢と希望を込めて夫が歴史の1ページをつくる人間になるとまで言う。

“Mr. Micawber will be—a page of History.”「ミコーバーさんは、歴史の1ページをつくる人になるでしょう」(p.1007)

ミセス・ミコーバーは夫の能力を生かせる仕事を見つけるために、自分の里であるプリマスへ行くことをデイヴィッドに告げる。しかし、夫の将来への不安や、双子のこと、そして混合酒の影響もあり、ヒステリー気味になる。この場面で彼女は“I never will desert Mr. Micawber.”「私は決してミコーバーさんを見捨てません」を連発する。彼女はこれを頻用することにより、

心の安定を図っているようだ。I never will desert Mr. Micawber. は夫の能力を過大評価する慣用句になっている。

“I never will desert Mr. Micawber. Mr. Micawber may have concealed his difficulties from me in the first instance, but his sanguine temper may have led him to expect that he would overcome them. … But I never will desert Mr. Micawber. No!” cried Mrs. Micawber, more affected than before, “I never will do it! It’s of no use asking me!”… “Mr. Micawber has his faults. I do not deny that he is improvident. I do not deny that he has kept me in the dark as to his resources and his liabilities, both,” she went on, looking at the wall; “but I never will desert Mr. Micawber!”… “I never will desert you, Micawber!” she exclaimed. … “He is the parent of my children! He is the father of my twins! He is the husband of my affections,” cried Mrs. Micawber, struggling; “and I ne—ver—will—desert Mr. Micawber!” 「あの主人を捨てるなんて、そんなことできませんとも。あの主人も、初めのうちは、困ってること、わたしには隠してたらしいんですよ。とにかく、呑気な楽道家なもんですから、なんか、乗り切れるつもりだったんでしょうね。…それでも、あの主人を捨てるなんて、そんなことができるもんですか。ええ、そうですとも」ミセス・ミコーバーは、いよいよ興奮して、叫んだ。「絶対、そんなことはできません！いくら頼まれたって、そんなことできません！」…「そりゃ、あの主人にも、落ち度はありますわよ。前後の考えも、何もない人だってこと、また財産のことも、借金のことも、一切わたしには、知らしてくれなかったってこと、そりゃ、別に否定いたしませんとも」壁を見つめながら、言った。「でも、それでも、あの主人を捨てるなんてことは、断じてできません！」…「ねえ、ミコーバー、あなたを見捨てるなんて、絶対にできません」彼女は叫んだ。…「この主人はね、この子供たちの父親なんですもの！この双生児の親なんですもの。わたしの大事な、大事な夫」ミセス・ミコーバーは身悶えしながら、叫んだ。「この主人を一捨てる—なんて—絶対に—できるもんですか！」 (pp.211-212)

(2) 文語的表現

ブルックはミセス・ミコーバーの会話について次のように指摘している。Mrs Micawber shares some of her husband’s linguistic characteristics, including a tendency to talk like a book, or rather like the leading article of a provincial newspaper. 「ミセス・ミコーバーは本や、地方新聞の論説のように話す夫の言語の特徴を共有している」³⁾。ミセス・ミコーバーはミスター・ミコーバー同様に、ラテン語やラテン語系の単語を用いる。

“When I lived at home with papa and mama, I really should have hardly understood what the word meant, in the sense in which I now employ it, but experientia does it—as papa used to say.” 「わたしも、

両親と一緒に暮らしてましたときは、困るなんてこと、どんなことだか、今言っているような意味じゃ、まるで分からなかったものですが、やっぱり、父もよく申しましたように一経験ってものは、おそろしいものですわねえ」(p. 195) experientia does it はラテン語の格言 *Experientia docet* (=experience teaches) が訛った形で、ラテン語の *docet* を英語流に発音すると *does it* に近くなる。

ミセス・ミコーバーはしばしば会話の中に文語的表現を挿入する。*die* 「死ぬ」を、*depart this life* 「この世を後にする」、*expire* 「息を引きとる」で表現する。

“My mama departed this life,” said Mrs. Micawber, “before Mr. Micawber’s difficulties commenced, or at least before they became pressing. My papa lived to bail Mr. Micawber several times, and then expired, regretted by a numerous circle.” 「母さんはね、あの主人の貧乏が始まる前に、少なくとも、そんなにひどくならない前に、この世を後にしたの。父さんの方は、ずっと生きていて、あの主人の保釈などにも、何度か、骨を折ってもらったもんだけど、結局は、みんなに惜しまれながら、息を引き取ったの」ミセス・ミコーバーは言った。(p.210)

第3章 ミス・ベッチー・トロットウッド

デイヴィッドはミス・ベッチーの容姿について *My aunt was a tall, hard-featured lady, but by no means ill-looking. There was an inflexibility in her face, in her voice, in her gait and carriage, amply sufficient to account for the effect she had made upon a gentle creature like my mother; but her features were rather handsome than otherwise, though unbending and austere.* 「伯母は、背が高く、きつい顔をした女だったが、不美人では決してなかった。顔といい、声といい、それからまた足取り、物腰といい、妙にぎこちないところがあって、私の母のように気の弱いものは、それだけでもう、怯えてしまうのだが、ただ融通がきかなくて、厳しいだけで、むしろどちらかと言えば、美人の方だった」(p.239) と説明している。

コックシャットはミス・ベッチー・トロットウッドについて次のように述べている。 *Betsey Trotwood herself is perfectly in the tradition of the fairy godmother—omnipotent, wilful and kind. She has no human need to conform herself to reality. All her prejudices, some of which are cruel, are treated as admirable. Fairy godmothers have a right to them.* 「ベッチー・トロットウッド自身は完全に全能で、我儘で、優しい、妖精の名付け親の伝統に属している。彼女は人間として現実に関心を順応させる必要はない。すべての彼女の偏見、そのいくらかは残酷であるが、賞賛に値するものである。妖精の名付け親は偏見を持つことが許される」¹⁾。またウエップはベッチー・トロットウッドを「ディケンズが創りあげたもっとも心温かな人物の一人」²⁾としている。この章で

はミス・ベッチーの言葉を独断性とうろ覚えの2つに分ける。

(1) 独断性

ミス・ベッチーはなんでも一方的に決めてしまう独断性を持っている。デイヴィッドの母(クララ)が出産する数時間前、生まれてくる子を勝手に女の子と決めつけ、自分がその名付け親になると言う。

“You were speaking about its being a girl,” said Miss Betsey.

“I have no doubt it will be a girl. I have a presentiment that it must be a girl. Now, child, from the moment of the birth of this girl—”

“Perhaps boy,” my mother took the liberty of putting in. “I tell you I have a presentiment that it must be a girl,” returned Miss Betsey. “Don’t contradict. From the moment of this girl’s birth, child, I intend to be her friend. I intend to be her godmother, and I beg you’ll call her Betsey Trotwood Copperfield. There must be no mistakes in life with *this* (原文, イタリック) Betsey Trotwood.”

「あなたは女の子のことを言っていたね」ミス・ベッチーが言った。

「きっと女の子だよ。そうに違いない気がするの。だから、女の子が生れたら—」

「多分男の子だと思うんですの」母は思いきって言葉をはさんだ。「きっと女の子に違いないと言ったでしょう」ミス・ベッチーは返した。「よけいな口答えするもんじゃないの。女の子が生れたら、私が力になってやるつもりよ。名付け親になってやるつもり、そしてベッチー・トロットウッド・コパフィールドって名にしてほしいの。今度のベッチー・トロッドにはね、一生過ちがあってはいけないのよ」(p.9) ミス・ベッチーは最初、girlをservant「召使い」の意で用いた。

ミス・ベッチーは人名に対して強い偏見を持っている。もしその名が気に入らなければ難癖をつける。デイヴィッドの育児婦ペゴティーの名前には嫌悪感を抱いている。

“I don’t mean that. I mean your servant.”

“Peggotty,” said my mother.

“Peggotty!” repeated Miss Betsey, with some indignation. “Do you mean to say, child, that any human being has gone into a Christian church, and got herself named Peggoty?”

「そんなこと言ってるんじゃないわよ。あの女中のことだよ」

「ペゴティーって言いますの」と母が答えた。

「ペゴティーだって！」ミス・ベッチーは不満げに繰り返した。「何だって、仮にも教会に通う人間で、よくもまあペゴティーなんて名前を付けてもらったもんねえ？」(p.8)

“And then there’s that woman with the Pagan name,” said my aunt, “that Peggotty, *she* (原文, イタリアリック) goes and gets married next. Because she has not seen enough of the evil attending such things, *she* (原文, イタリアリック) goes and gets married next, as the child relates. I only hope,” said my aunt, shaking her head, “that her husband is one of those Poker husbands who abound in the newspapers, and will beat her well with one.” 「それから、あの女がいるのよ、罰当たりな名前をした」伯母は言った。「ペゴティー、これがまた、続いて結婚するそうじゃないの。そういうことが、どんなによくないことを生むか、よく知らないから結婚するのよ、この子の話じゃ。いずれはその亭主は」伯母は頭を振って言った。「よく新聞に出るあの火かき亭主に決まってるわよ、そしてその火かきで、あの女をぶん殴ればいいと思うんだけども」(p.244)

ミス・ベッチーは自分自身の不幸な結婚から、世の男性を donkey 「頓馬、愚か者」とみなす。ゴールドディングはミス・ベッチーと donkey の関係について、It would be argued that her other obsession—the incessant war she wages on donkeys (and their owners) who dare to trespass on the patch of green before her cottage—is really one and the same as that involving the male sex: in other words, that all men are donkeys! 「彼女のほかの強迫観念—彼女の家の前の芝生に平気で侵入してくるロバ(とそのロバ使い)との絶え間ない戦争は—実際、彼女と男性との関係に全く同じである。つまりすべての男性はロバ! だと言えよう」³⁾と述べている。彼女のロバに対する敵対心をデイヴィッドは、The one great outrage of her life, demanding to be constantly avenged, was the passage of a donkey over that immaculate spot. In whatever occupation she was engaged, however interesting to her the conversation in which she was taking part, a donkey turned the current of her ideas in a moment, and she was upon him straight. 「とにかく、場所もあろうにこの処女地を、ロバの足で汚されるということは、伯母としては、一生の大屈辱、すぐにも復讐を遂げないではいけないのだった。何をしようが、どんな面白い話の最中であろうが、ロバさえ見れば、一瞬にして、頭の中は切り変わり、すぐにそれに向かって突進するのだった」(p.241) とコメントしている。ミス・ベッチーはロバを見ると、“Janet! Donkeys!” 「ジャネット! ロバよ!」と奇声を発する。

Janet had gone away to get the bath ready, when my aunt, to my great alarm, became in one moment rigid with indignation, and had hardly voice to cry out, “Janet! Donkeys!” ジャネットは、お湯の支度に行っていたが、その時だった、驚いたことに、伯母が、急にきつと血相を変えたかと思うと、声もかれがれに、「ジャネット! ロバが!」と叫んだのである。(pp.240-241)

These interruptions were the more ridiculous to me, because she was giving me broth out of a tablespoon at the time (having firmly persuaded herself that I was actually starving, and must receive nourishment at first in very small quantities), and, while my mouth was yet open to receive the spoon, she would

put it back into the basin, cry "Janet! Donkeys!" and go out to the assault. こうした幕間劇は、私にとっては、馬鹿らしいかぎりだった。というのは、その時、彼女は大匙でスープを飲ませてくれていたのだが（彼女に言わせると、私は、飢えて死にかかっている。なんとか少しずつでも、滋養を取らなければいけない、というのである）、私が匙からスープを飲もうと口をあけたとき、それをまた鉢の中へ返すと、「ジャネット！ロバだよ！」と叫び、そして突撃へと飛び出したものだ。（pp. 241-242）

"Well, well!" said my aunt, "the child is right to stand by those who have stood by him. — Janet! Donkeys!" I thoroughly believe that but for those unfortunate donkeys, we should have come to a good understanding. 「いいとも、いいとも！」伯母は言った。「この子が、味方をしてくれた者に味方するのは、当然だわ——ジャネット！ロバだよ！」私は確信しているのだが、もしこのまずいロバの闖入さえなければ、私と伯母との間は、きっとよい了解に達していたに違いない。（p. 245）

(2) うろ覚え

ミス・ベッチーはドクター・チリップ（Dr. Chillip）の名前を正確に覚えていない。その証拠にジェリップス（Jellips）などの名前を挙げ、最後には名前なんてどうでもいいと述べている。このことから彼女は他人の名前にはあまり関心がないようだ。

"That little man of a doctor, with his head on one side," said my aunt, "Jellips, or whatever his name was, what was *he*（原文、イタリック）about? All he could do was to say to me, like a robin redbreast — as he *is*（原文、イタリック）— 'It's a boy.' A boy! Yah, the imbecility of the whole set of 'em!"

「思案投げ首みたいな、あの小さな医者、——ジェリップスとか言ったかね、名前なんて、どうでもいいけど、あのお医者ったら、いったい、何をしてたのよ？まさかあの駒鳥のロビンじゃあるまいし——いいえ、そうなのよ——『ああ、坊っちゃんでございます』だって、へっ、坊っちゃんが、何だって言うのよ！やれやれ、あいつら、なんて能なしばかりなんだろうねえ」

（p. 244）

マードストーン（Murdstone）の名前も正確に覚えず、人殺しのマーダラー（Murderer）と混同している。Murdstone は murder 「殺害」と stone 「石」の合成語である。

"And then, as if this was not enough, and she had not stood sufficiently in the light of this child's sister, Betsey Trotwood," said my aunt, "she marries a second time — goes and marries a Murderer — or a man with a name like it — and stands in *this*（原文、イタリック）child's light!" 「しかもね、それだけじゃ、まだ足りないで、そして、この子の妹のベッチーを不幸にするだけじゃ、まだ不足だとでもい

うのかねえ」伯母は言った。「再婚までやってのけてさ、—それも、人もあろうに、人殺しか何だか—たしかそんなふうな名前の男と再婚してさ、今度は、この子まで不幸にしてるんだからねえ！」(p.244)

ミス・ベッチーは Miss Murdstone の名前をはっきりと覚えていないため Murdering sister 「殺し屋の姉」と説明している。

“It was a donkey,” said my aunt; “and it was the one with the stumpy tail which that Murdering sister of a woman rode, when she came to my house.” This had been, ever since, the only name my aunt knew for Miss Murdstone. 「たしかに驢馬だったわ」伯母は言った。「それも、あの切り株みたいな尻尾しっぽをしたやつ、—ほら、いつかマーダリングの姉が乗って家にやってきた、あの驢馬に決まってるよ」あれ以来、伯母はミス・マードストンのことを、終始マーダリング・シスターで、覚えているのである。(p.429)

第4章 ミス・モウチャー

デイヴィッドはミス・モウチャーの容姿を次の様に述べている。

Throat she had none; waist she had none; legs she had none, worth mentioning; for though she was more than full-sized down to where her waist would have been, if she had had any, and though she terminated, as human beings generally do, in a pair of feet, she was so short that she stood at a common-sized chair as at a table, resting a bag she carried on the seat. 「首もなければ、腰も無い。脚もまた、脚といえるほどのものは、まずなかった。仮にこの女にも、腰というものがあるとすれば、胸からずっと、その辺までは、それこそ化け物めいた肥り方であり、そのあと、下半身は、さすがに人間並みに、2本脚では終わっているが、とにかく、おそろしいチンチクリンだ。普通の大きさの椅子に来て、持っていた手提げ袋をその座席に置いたのだが、なんのことはない、まるでテーブルにとまったも同然という格好」(p.406)

ミス・モーチャーは上流階級に得意先を持つ化粧品商・調髪師である。大変なおしゃべりで、気まぐれだが、心の優しい正直者である。

ミス・モーチャーは22章と32章に登場するが、話し方は対照的である。これについてゴールディングは、The one endowed with the makings of a noteworthy idiolect rooted in the non-standard dialect and full of easy, impudent familiarity, slang, pert rhetorical questions and imperatives, the other completely and colourlessly standard, subdued, with forced slides into the stale rhetoric of conventional melodrama. 「前者は非標準の方言に根ざした注目すべき個人語からなっていて、それには打ち解けて横柄な親しみ、俗語、生意気な修辞疑問と命令が多く含まれている。そして後者は全く

生彩を欠いて抑制された標準語で、それが従来の陳腐な修辭的メロドラマの中に挿入されている¹⁾と述べている。

この章ではミス・モーチャーの言葉を3つのカテゴリー (1) 呼びかけ語, (2) 親心の‘we’ (paternal we), (3) 婉曲表現に分ける。

(1) 呼びかけ語

ミス・モーチャーはスティアフォースとデイヴィッドを様々な呼び方で呼んでいる。ゴールディングはこれについて、*She is altogether fond of being suggestively euphemistic, as again becomes apparent in her habit of showering names of various kinds (sarcastically derogatory for the most part) on those she is talking to or about.* 「彼女は全体的に見て暗示的な婉曲語法を好む。それは彼女が話しかけたり、話題にしている人に様々な名前 (ほとんどの場合が皮肉的な悪口) を浴びせる彼女の習慣に明白である²⁾と述べている。

“Go along, you dog, do!” cried the little creature, making a whisk at him with the handkerchief with which she was wiping her face. 「ま、憎たらしい人！行っちまいなさいよ！」と小人は言いながら、顔をふいていたハンケチを彼に向けて振った。(p.407)

“Five bob,” replied Miss Mowcher, “and dirt cheap, my chicken. Ain’t I volatile, Mr. Copperfield?” 「5シリング、ひどく安いでしょう、坊や。コパフィールドさん、わたし、うるさくない？」ミス・モーチャーは答えた。(p.416)

“I (原文, イタリック) forgive you! ‘Bob swore!’ – as the English man said for ‘Good night,’ when he first learnt French, and thought it so like English. ‘Bob swore,’ my ducks!” 「でも、勘弁してあげるわ！お休みなさい、—あるイギリス人がね、フランス語の稽古を始めたときね、お休みのつもりで、ポップ・スウォアって言ってしまったんだって。そしてこれが英語そっくりだと思ったのよ。じゃ皆さん、ポップ・スウォア！」(pp.416-417)

“Well then,” cried Miss Mowcher, “I’ll consent to live. Now, ducky, ducky, ducky, come to Mrs. Bond and be killed.” 「それじゃ、このまま、生きるとしましよかねえ。さ、可愛い、可愛いカモちゃんよ、ボンド夫人のところに行って、死んでおしまい」ミス・モーチャーは叫んだ。(p.411)

“The Russian Prince is a client of yours, is he?” said Steerforth. “I believe you, my pet,” replied Miss Mowcher. “I keep his nails in order for him. Twice a week! Fingers *and* (原文, イタリック) toes.” 「そのロシアの公爵ってのは、あなたのお客なんだね？」スティアフォースは言った。「そうなのよ、あんた。いつも、爪の手入れをお引き受けしてるのよ。1週間に2度ね！手の指も、それから足の指も」ミス・モーチャーは答えた。(p.409)

“What! My flower!” she pleasantly began, shaking her large head at him. “You’re there, are you! Oh, you naughty boy, fie for shame, what do you do so far away from home?” 「まあ！私の可愛い人！」彼女は、楽しそうに、大きな頭を振り始めた。「こんなところにいたのねえ！ほんとに、しょうのない人、いけませんわよ！こんな遠いところへ来て、何してらっしゃるのよ？」 (p.407)

“That’s tellings, my blessed infant,” she retorted, tapping her nose again, screwing up her face, and twinkling her eyes like an imp of supernatural intelligence. 「それは内緒、ねえ、あんた」、彼女は言い返した。また鼻を叩き、顔をゆがめて、まるで霊界の秘密に通じている小鬼とでもいった格好だった。(p.408)

“Ha! ha! ha! What a refreshing set of humbugs we are, to be sure, ain’t we, my sweet child?” replied that morsel of a woman, feeling in the bag with her head on one side and her eye in the air. 「ハッ！ハッ！ハッ！だって、そうじゃない、わたしたち、みんな、ほんとに甘っちょろいお馬鹿さんばかりね、あんた？」ポケット版女性は、小首をかしげ、上目使いに、袋の中を手探りしながら、答えた。(p.409)

“Put this and that together, my tender pupil,” returned the wary Mowcher, touching her nose. 「あれこれ、ちゃんと、考えてね、坊っちゃん」用心深いミス・モーチャーは鼻の頭をこすりながら答えた。(p.412)

“My dear young soul,” returned Miss Mowcher, squeezing her hands upon her heart one over the other. “I am ill here, I am very ill. To think that it should come to this, when I might have known it and perhaps prevented it, if I hadn’t been a thoughtless fool!” 「ねえ、あんた」ミス・モーチャーは両手を重ねて胸のあたりを押さえながら答えた。「ここが悪いのよ、とってもね。こんなことになろうとはねえ！わたしが、こんな馬鹿でなかったらね、もっと前から、ちゃんとわかって、なんとかできたんでしょにねえ！」 (p.572)

Jockey of Norfolk は初代ノーフォーク公ジョン・ハワード（1485年没）のことで、戦死の前夜、落首^{らくしゅ}の警告を受けたという。ミス・モーチャーはスティアフォースに行動を慎んでもらいたい気持ちで Jockey of Norfolk! をおどけて用いる。

“You must call up all your fortitude, and try to bear it. Good-bye, Mr. Copperfield! Take care of yourself, Jockey of Norfolk! How I *have* (原文、イタリック) been rattling on!” 「勇気を出して、我慢なさいね。さようなら、コパフィールドさん！それからノーフォークのお兄さん、お元気でね！よくしゃべったわねえ！」 (p.416)

(2) 親心の 'we' (paternal we)

ミス・モーチャーは you の代わりに we を用いる。相手の利益・関心を自分のそれとみなす親心の 'we' は相手の健康や近況を伺うときに you の代わりに用いられる。上流階級に得意先をもつ調髪師ミス・モーチャーが初対面のデイヴィッドに対して用いる 'we' には庇護と戯れの調子が著しい。

“Oh, my goodness, how polite we are!” exclaimed Miss Mowcher, making a preposterous attempt to cover her large face with her morsel of a hand. 「あら、ま、礼儀正しくていらっしやること！」ミス・モーチャーは声をあげ、ちっちゃな手で、仰仰しく大きな顔を隠そうとした。(p. 409)

ミス・モーチャーはまた I の代わりに庇護的な we を用いる。

“Have it carried half a quarter of an inch towards the temple,” said Miss Mowcher. “We can do it in a fortnight.” 「8分の1インチくらい、こめかみの方へのばすのねえ」ミス・モーチャーは言った。「2週間もあれば、できるわよ」(pp. 415-416)

“Just half a minute, my young friend, and we’ll give you a polishing that shall keep your curls on for the next ten years!” 「ちょっと、待ってなさいね、坊っちゃん、10年はもとうという薬を、すり込んであげますから！」(p. 411)

ミス・モーチャーはデイヴィッドに、これまで自分が社会から受けた差別についての不満をもらす。そこで彼女は自分自身を表すのに、固有名詞の little Mowcher を用いる。I の代わりに自分の名前を用いるのは幼児に見られる現象で、I に比して感情的である。

“If little Mowcher addressed herself to him, or the like of him, because of her misfortunes, when do you suppose her small voice would have been heard?” 「リトルモーチャーが自分の不幸をね、あの男や、あんな連中に訴えてみたところで、そのかほそい声が、いつ聞いてもらえるとお思い？」(p. 573)

“Little Mowcher would have as much need to live, if she was the bitterest and dullest of pigmies; but she couldn’t do it.” 「リトルモーチャーは生きてかなくちゃならないのよ、たとえひどく意地が悪く、鈍感な小人だとしても。だけどそれができないのよ」(p. 573)

“And Littimer had better have a bloodhound at his back than little Mowcher!” 「そして、あのリティマーは、このリトルモーチャーよりも、犬に追われた方がいいのよ！」(p. 576)

(3) 婉曲表現

my stars and garters! 「あら、まあ！」は驚きを示す間投詞である。ミス・モーチャーは garters 「靴下留め」という表現に抵抗があり、my stars and what’s-their-names! 「my stars と何とか」

とおどけてみせる。山本はこれについて「‘My stars!’という驚きの間投詞を‘stars and garters’（勲章）にかけて滑稽に言った文句である」³⁾と述べている。

“Oh my stars and what’s-their-names!” she went on, clapping a hand on each of her little knees, and glancing shrewdly at me. “I’m of too full a habit, that’s the fact, Steerforth. After a flight of stairs, it gives me as much trouble to draw every breath I want, as if it was a bucket of water.” 「あら、まあ！」彼女は、片手で、両方の膝を、かわるがわる叩きながら、そして、私の顔を、横目でちらと睨んで、は、「ああ、どうも、肥りすぎねえ、スティアフォース。まるで水の入ったバケツでも下げるみたい。階段を上がるのが一苦勞、息が切れてしょうがないわ」(p.407)

ミス・モーチャーはチャーリーの言葉をデイヴィッドに伝える時、What the hell…?と云うことに抵抗があり、What the unmentionable to ears polite…?を用いる。the unmentionable to ears polite は「上品な耳には入れてはいけないもの」の意。

“What the unmentionable to ears polite, do you think I want with rouge?” 「いったいどうして私が口紅を必要だと思ひ？」(p.412)

疑問詞の意味を強める in the name of blind ill-fortune 「一体全体」は God 「神」の名前を口にするのははばかるので God の代わりに blind ill-fortune を用いた。この blind は Love is blind. 「恋は盲目」を暗示している。

“Child, child! In the name of blind ill-fortune,” cried Miss Mowcher, wringing her hands impatiently, as she went to and fro again upon the fender, “why did you praise her so, and blush, and look disturbed?”

「じゃ、お伺いするけどね」と、ミス・モーチャーは、また、炉囲いにかけてまま、身体をゆすり、いらいらしたように、両手を揉みながら、叫んだ。「一体全体、なぜあの娘さんのことを、あんなに褒めたのよ？しかも、真っ赤になって、もじもじして？」(p.574)

ミス・モーチャーは Satan 「魔王」という言葉を口にするのをためらい、the Father of all Evil 「すべての邪悪の父」という遠回しの表現を用いた。

“May the Father of all Evil confound him,” said the little woman, holding up her forefinger between me and her sparkling eyes; “and ten times more confound that wicked servant; but I believed it was *you* (原文、イタリック) who had a boyish passion for her!” 「あんな男、悪魔にでも呪われればいいんだわ」とちっちゃな女は、私と、きらきら光る彼女の目との間に、人差し指を立てて、言った。「それから、あの邪悪な召使、あいつこそ、その10倍以上呪われたらいい。でも、あの娘さんに、^{うぶ}初心な熱上げてたのは、あんたじゃないの！」(p.574)

ヴィクトリア朝は身体の一部が人目につくことは、一大事だった。ミス・モーチャーはスティアフォースとデイヴィッドに ankles 「くるぶし」を見られたら自殺すると言う。

“If either of you saw my ankles,” she said, when she was safely elevated, “say so, and I’ll go home and destroy myself.” 「どっちかが、わたしのくるぶし見たら」彼女は無事に立ち上がると、言った。「見たとおっしゃい。わたしは家に帰って、死んじゃうから」(p. 411)

髪の毛を切ることを explore the polar regions 「極地探検をする」とおどけて言う。the polar regions 「極地」は頭髪のことである。

“Well, well!” she said, smiting her small knees, and rising, “this is not business. Come, Steerforth, let’s explore the polar regions, and have it over.” 「やれ、やれ！」彼女は、小さな膝を叩き、立ち上がりながら言った。「これは余計なお話よ。さあ、ステイアフォース、極地探検の方をやってしましましょうよ」(p. 410)

a long line of Walkers, that I inherit all the Hookey estates from の字義通りの意味は「私が Hookey の屋敷全部を継いでいる歴代の Walkers」。(Hookey) Walker! 「まさか、馬鹿な」は不信を表す間投詞である。「私が嘘の遺産を継いでいる歴代の架空の家柄」は祖先から全く遺産を受け継いでいない、の意。

“It was Walker, my sweet pet,” replied Miss Mowcher, “and he came of a long line of Walkers, that I inherit all the Hookey estates from.” 「その名はウォーカー（詐欺師）でした、あなた」ミス・モーチャーは答えた。「彼は私が嘘の遺産を継いだ歴代のウォーカーの出だったのです」(p. 408)

through the nose を speak through the nose 「言葉が鼻にかかる」と pay through the nose 「多く支払う」の2つの意味で用いた。また close shavers を「短くひげを刈り込む人」と「ケチン坊」の2つの意味合いで用いている。

“(He) Pays as he speaks, my dear child—through the nose,” replied Miss Mowcher. “None of your close shavers the Prince ain’t. You’d say so, if you saw his moustachios. Red by nature, black by art.” 「ひどく気前がいいんでね—まるで鼻歌でも歌うみたいな気分で、払ってくれるのよ」ミス・モーチャーは答えた。「公爵さんはね、あんた方みたいな、ひげなしじゃないのよ。あんた方だって、あの人の口ひげを見りゃ、きっと、そう言うに決ってるわ。もとは、赤色なんだけど、手入れで、黒色にしているの」(p. 410)

終章

本論ではチャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』の4人の登場人物(ミスター・ミコーバー、ミセス・ミコーバー、ミス・ベッチー・トロットウッド、ミス・モーチャー)の個人語 (idiolect) について論じた。彼らの個人語をまとめると次のようになる。

ミスター・ミコーバーは直截的な話し方をいさぎよしとせず、身分不相応な高尚な文体(lofty

style) を愛用する。特に健康に関する表現では, *convalescent* 「病気から回復する」(p. 319) や *comestibles* 「食物」(p. 512) などのラテン語を起源とする難解な表現を用いたり, 長い間, 食欲がないことを, “*Appetite and myself have long been strangers.*” 「食欲と私は, 長い間, 他人同士ですね」(p. 925) と回りくどい表現する。また話の繋ぎに ‘*in short*’ 「要するに」を用いたり, 彼の人生哲学を象徴する ‘*something will turn up*’ 「ことは良くなる」を用いる。その他にもシェイクスピアやカトーなどの文学作品から引用したものやミコーバーが自分自身で考え出した格言がある。

ミセス・ミコーバーは決まり文句 *I never will desert Mr. Micawber.* 「私は決してミコーバーさんを見捨てません」を頻用する。また彼女はいつもミスター・ミコーバーを過信し, *talent* 「才能」, *ability* 「能力」, *spirit* 「精神, 心」, *power* 「力」などの言葉を用いて彼を過大評価する。

ミス・ベッチー・トロットウッドは人名に対して強い偏見を持ち, 人名をうろ覚えする癖がある。また自分の不幸な結婚から, 世の男性をロバと見なす。

ミス・モーチャーはステイアフォースとデイヴィッドに対して *dog, my chicken, my ducks, my pet, my flower, naughty boy, my blessed infant, my sweet child* など様々な呼びかけ語を用いる。また親心の ‘*we*’ (*paternal we*) を用いたり, ヴィクトリア朝特有の婉曲表現を用いている。

本論ではミスター・ミコーバーのラテン語を起源とする難解な単語を列挙したが, その単語の語源やその単語を使用するに至った経緯が究明されていない。また ‘*in short*’ や ‘*something will turn up*’ の慣用表現は前後の文脈から, その特徴を更に細分化出来るのではないかと考えられる。本論以外の登場人物, デイヴィッド・コパフィールド, ミスター・ペゴティー, ステイアフォース等も個人語の観点から今後研究を進めたい。

註

序章

- 1) 中野好夫訳『デイヴィッド・コパフィールド』(I), 406頁.
- 2) G. K. チェスタトン・小池 滋/金山亮太訳『チャールズ・ディケンズ』, 193-194頁.
- 3) G. N. リーチ/M. H. ショート・笥 壽雄監修『小説の文体』, 70頁.
- 4) 吉田孝夫『ディケンズのことば』(増補改訂版), 46頁.

第1章

- 1) マイケル・スレイター・佐々木徹訳『ディケンズの遺産』, 30頁.
- 2) G. K. チェスタトン・小池 滋/金山亮太訳『チャールズ・ディケンズ』, 198頁.
- 3) 榊井迪夫/田辺昌美編著『ディケンズの文学と言語—ディケンズ没後百年記念論文集』, 150頁.
- 4) 吉田孝夫『ディケンズのことば』(増補改訂版), 24頁.

- 5) T. Yamamoto. *Growth and System of the Language of Dickens*. 93頁.
- 6) G. L. Brook. *The language of Dickens*. 160頁.
- 7) 吉田孝夫『ディケンズのことば』(増補改訂版). 49頁.
- 8) 榎井迪夫/田辺昌美編著『ディケンズの文学と言語ーディケンズ没後百年記念論文集』. 139頁.

第2章

- 1) 榎井迪夫/田辺昌美編著『ディケンズの文学と言語ーディケンズ没後百年記念論文集』. 141頁.
- 2) G. K. チェスタトン・小池 滋/金山亮太訳『チャールズ・ディケンズ』. 198-199頁.
- 3) G. L. Brook. *The language of Dickens*. 161頁.

第3章

- 1) A. O. J. Cockshut. *The imagination of Charles Dickens*. 121頁.
- 2) L. K. ウエップ・小池 滋/石塚裕子訳『チャールズ・ディケンズ』. 121頁.
- 3) R. Golding. *Idiolects in Dickens*. 140頁.

第4章

- 1) R. Golding. *Idiolects in Dickens*. 142頁.
- 2) 前掲書. 142-143頁.
- 3) 山本忠雄註釈 *David Copperfield* (vol. II.) Notes. 137頁.

テ キ ス ト

- 山本忠雄註釈 *David Copperfield* (vols. I, II, III). 研究社英米文学双書. 1954.
Charles Dickens. *David Copperfield*. Oxford. 1998.
Charles Dickens. *David Copperfield*. Penguin Books. 2004.
中野好夫訳『デイヴィッド・コパフィールド』(vols. I, II, III, IV). 新潮文庫. 1974.

参 考 文 献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. Sinclair-Stevenson. 1990.
Ackroyd, Peter. *Dickens Public Life and Private Passion*. BBC. 2002.
Allen, Walter. *The English Novel: A short Critical History*. Phoenix House. 1963.
Bowen, John. *Other Dickens*. Oxford University Press. 2001.
Brook, G. L. *The language of Dickens*. Andre Deutsch. 1969.
Cockshut, A. O. J. *The imagination of Charles Dickens*. University Paperbacks. 1965.
Davis, Paul. *Charles Dickens A to Z*. Checkmark Books. 1999.
Davis, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth; Penguin. 1999.
Ellis, Roger. *Victorian Britain 1851-1901*. Stackpole Books. 1997.
Golding, Robert. *Idiolects in Dickens*. Macmillan. 1985.
Jespersen, O. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7 vols. Winter. 1909-49.

- Poutsma, H. *A Grammar of Late Modern English*. 5 vols. Noordhoff. 1904-29.
- Pritchard, R. E. *Dickens's England*. Sutton Publishing. 2002.
- Roberts, P. *Understanding Grammar*. Harper & Row. 1954.
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford. 1999.
- Storey, Graham. *David Copperfield, Interweaving Truth and Fiction*. Twayne Publishers. 1991.
- Yamamoto, Tadao. (山本忠雄) *Growth and System of the Language of Dickens*. Keisuisha. 2003.
- G. K. チェスタトン・小池 滋／金山亮太訳『チャールズ・ディケンズ』春秋社. 1992.
- G. N. リーチ／M. H. ショート・笈 壽雄監修『小説の文体』研究社. 2002.
- L. K. ウエップ・小池 滋／石塚裕子訳『チャールズ・ディケンズ』大日本印刷. 1989.
- マイケル・スレイター・佐々木徹訳『ディケンズの遺産』原書房. 2005.
- 植木研介『チャールズ・ディケンズ研究—ジャーナリストとして、小説家として—』南雲堂フェニックス. 2004.
- 梶井迪夫／田辺昌美編著『ディケンズの文学と言語—ディケンズ没後百年記念論文集』三省堂. 1972.
- 齊藤 勇『イギリス文学史』（改訂増補第5版）研究社. 1974.
- 三ツ星堅三『チャールズ・ディケンズ—生涯と作品—』創元社. 1995.
- 森谷佐三郎『英文学史読本』こびあん書房. 1992.
- 山本忠雄『ディケンズの英語』研究社. 1964.
- 吉田孝夫『ディケンズの笑い』晃学出版. 1982.
- 吉田孝夫『ディケンズのユーモア』晃学出版. 1986.
- 吉田孝夫『ディケンズを読んで』あぼろん社. 1991.
- 吉田孝夫『ディケンズのことば』（増補改訂版）あぼろん社. 1998.
- 吉田孝夫『英語の語法』晃洋書房. 1998.

辞 書

- The Oxford English Dictionary* [OED]. 1989.
- The Concise Oxford Dictionary* [COD]. 2002.
- The Pocket English Dictionary* [POD]. 2002.
- 【研究社英和大辞典】. 2002.
- 【研究社英米文学辞典】. 1996.
- 【研究社新英和中辞典】. 1989.